

天平二年筑紫梅花の宴：『万葉集』巻五・八一五～ 八四六番歌の構造

後藤，康文
宮崎大学教育学部講師

<https://doi.org/10.15017/11902>

出版情報：語文研究. 72, pp.13-21, 1991-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

天平二年筑紫梅花の宴

——『万葉集』卷五・八一五〜八四六番歌の構造——

後藤康文

『万葉集』卷五の「梅花歌三十二首」(八一五〜八四六)は、いったいどのような構造を持った歌群と把握すべきであるのか。——この問題に関する今日までの研究史を一方では繕きつつもなお釈然としない思いを抱えたまま、原文を矯めつつ抄めつつしているうちに、ある時ふと素朴な疑問につきあたったのである。

—

その疑問とは、劈頭の八一五番歌、

正月立ち春の来たらばかくしこそ梅を招きつつ楽しきをへめ

がいわば開宴の歌であり、しんがりの八四六番歌

霞立つ長き春日をかざせれどいやなつかしき梅花の花かも

がいわば閉宴の歌であることは衆目の認めるところであるのに、ど

うして、前者との類似が指摘される八三三番歌、

年のはに春の来たらばかくしこそ梅をかざして楽しく飲まめ

を同じく「開宴の歌」と考え、かつ、後者との類似が指摘される八二八番歌、

人ごとに折りかざしつづ遊べどもいやめつらしき梅花の花かも

をやはり「閉宴の歌」と見なす発想が見あたらないのかということである。

語句単位にとどまらぬ歌一首の「類似」という点では、たとえば、八一七番歌「梅の花咲きたる苑の青柳は纏にすべくなりにけらずや」と八二五番歌「梅の花咲きたる苑の青柳を纏にしつづ遊び暮らさな」との関係など、当面の歌群内において、なお幾組かを挙げることもできる。しかしながら、はじめのふた組とその他の組との「類似」の様相は、おそらく等質ではあるまい。つまり、八三三は開宴歌

たる八一五を単純に模倣し、かたや、閉宴歌たる八四六は単に先行する八二八の影響下にのみ成ったものとは思われないのである。

八一五番歌が、『琴歌譜』片降の、

新しき年の始めにかくしこそ千歳をかねて楽しきをへめ

を換骨奪胎した作であることは、諸家の言及するところであるが、天平十四年春正月の『統日本紀』歌謡「壬戌の日、天皇大安殿に御して群臣を宴す。酒酣なるとき、五節の田舞を奏し、訖りて更に少年童女をして踏歌せしめ、また宴を天下の有位の人並びに諸司の史生に賜ふ。ここに六位以下の人等、琴を鼓きて歌ひて曰はく、新しき年の始めにかくしこそ仕へ奉らめ万代までに」、『催馬楽』新しき年「新しき年の始めに、や、かくしこそ、はれ、かくしこそ、仕へ奉らめ、や、万代までに、あはれ、そこよしや、万代までに」、さらに『古今集』巻第二十の大歌所御歌「新しき年の始めにかくしこそ千歳をかねて楽しきをつめ」なども含めて、いわれるようにそこには、新年の宴席における寿歌の「型」が確固として存在していることが知られるわけで、『万葉集』八一五番歌の詠主はその伝統にのっとって、天平二年春正月、大宰帥大伴旅人郎において催された梅花賞翫の宴の口火を切る一首に、これを流用したのである。

そこまではよいとして、ではなぜ、八一五に酷似した八三三に就いては同じ「伝統」の享受を考えないのであろうか。確かに八三三の結句は『琴歌譜』歌謡の表現からやはずれたかたちになっているけれども、八一五が新年寿歌のヴァリエーションであるならば、八三三もそうであると想定することを否定し去る理由はどこに

もないはずである。すなわち、従来説明されてきたように、八三三番歌はただちに八一五番歌に倣って誕生した詠というのではなく、むしろ八一五を十分に意識しつつも、その根底には八一五の場合同様、伝統の歌型が厳然と存在しているのであって、両首はいわば共通の母体から生まれてきた兄弟歌の關係にあるのではないかと思われるのである。

このことは、もうひと組の歌についてもいえるのではないか。八二八番歌の下句「いやめづらしき梅の花かも」は、たとえば、柿本人麻呂が「長皇子、狛路の池に遊びましし時」に作った長歌(卷三・二二九)、

(上略) ひさかたの 天見ることく まそ鏡 仰ぎて見れど
春草の いやめづらしき わが大王かも

の歌い納めと同型であり、八四六の「いやなつかしき梅の花かも」もその変奏として当然この類型に含めてよい。とするならば、この「いや／かも」という納め方は、歌われた対象を賛仰賛美するひとつの定型と見なすことが許されるのではないかと思われ、さらに八二八と八四六とは、上句から下句への繋がりが「ども」「ど」と、ともに逆接の接続助詞をもってはたされているなど、歌一首の骨格も等しいといえる。したがって、ここで考えられることは、このふたつの類歌が、宴の閉じ目にあたって飽くことのない梅花賞翫の思いを座の総意として表わす「閉宴歌」のスタイルを、先の「開宴歌」のケースと同じく、ふたつながら襲っているのではないかということである。

「天平二年筑紫梅花の宴」において披露された三十二首の歌の中には、右に述べたとおり、開宴の歌が二首、そして、閉宴の歌もまた二首存在していたと考えるべきではないのだろうか。

二

もしそうであるとすれば、ことはそれだけでは終わらない。つまり、第一の開宴歌（八一五）と第一の閉宴歌（八一八）、第二の開宴歌（八三三）、と第二の閉宴歌（八四六）との間には、それぞれ十二首ずつ歌が納まっていることになり、また、第一の閉宴歌と第二の開宴歌との間には四首の歌が介在するかっこうになるのである。この事実は、場当たりに執り行われた歌宴がもたらした偶然の結果だとはいえず、とうてい考えられない。三十二首の全貌を一覧する便宜もかねて、ここでこのことを確認しておきたい。

▼正月立ち春の来たらばかくしこそ梅を招きつつ楽しきをへめ

梅の花今咲けるごと散りすぎずわがへの苑にありこせぬかも
(八一五)

梅の花咲きたる苑の青柳は纏にすべくなりにけらずや
(八一六)

春さればまつ咲く宿の梅の花ひとり見つつや春日暮らさむ
(八一七)

世の中は恋繁しゑやかくしあらば梅の花にもならましものを
(八一八)

(八一九)

12 首

梅の花今盛りなり思ふどちかさしにしてな今盛りなり
(八二〇)

青柳梅との花を折りかざし飲みてのちは散りぬともよし
(八二二)

わが苑に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも
(八二三)

梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ
(八三三)

梅の花散らまく惜しみわが苑の竹の林に鶯鳴くも
(八三四)

梅の花咲きたる苑の青柳を纏にしつつ遊び暮らさな
(八三五)

うちなびく春の柳とわが宿の梅の花とをいかにか分かむ
(八三六)

春されば木ぬれ隠りて鶯ぞ鳴きて去ぬなる梅が下枝に
(八三七)

▲人ごとに折りかざしつつ遊べどもいやめづらしき梅の花かも
(八二八)

梅の花咲きて散りなば桜花継ぎて咲くべくなりにてあらずや
(八二九)

万代に年は来経とも梅の花絶ゆることなく咲き渡るべし
(八三〇)

春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふと夜寝も寝なくに
(八三一)

梅の花折りてかざせる諸人は今日の間は楽しくあるべし
(八三二)

4 首

▽年のはに春の来たらばかくしこそ梅をかざして楽しく飲まめ

(八三二)

梅の花今盛りなり百鳥の声の恋しき春来たるらし

(八三三)

春さらば逢はむと思ひし梅の花今日の遊びにあひ見つるかも

(八三四)

梅の花手折りかざして遊べども飽き足らぬ日は今日にしあり

(八三五)

春の野に鳴くや鶯なつてわがへの苑に梅が花咲く

(八三六)

梅の花散りまがひたる岡びには鶯鳴くも春かたまけて

(八三七)

春の野に霧立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る

(八三八)

春柳纏に折りし梅の花誰か浮べし盆の上に

(八三九)

鶯の音聞くなへに梅の花わぎへの苑に咲きて散る見ゆ

(八四〇)

わが宿の梅の下枝に遊びつつ鶯鳴くも散らまく惜しみ

(八四一)

梅の花折りかざしつつ諸人の遊ぶを見れば都しぞ思ふ

(八四二)

妹が家に雪かも降ると見るまでにここだもまがふ梅の花かも

(八四三)

梅の花今盛りなり百鳥の声の恋しき春来たるらし

(八四四)

鶯の待ちかてにせし梅が花散らずありこそ思ふ子がため

(八四五)

△霞立ち長き春日をかざせれどいやなつかしき梅の花かも

(八四六)

こうした区分けを施してみると、この歌宴は、中間に四首の歌を挟み、前後各十四首よりなる二部構成であったと捉えてみることが出来る。八一五番歌は、その第一部の開宴歌なのであり、これに呼応するのは末尾の八四六番歌ではなく八二八番歌にほかならず、その間には十二首の詠作が並ぶ。そして、八三三番歌によって再び歌宴の始動が促され、前半とまったく同数の十二首を挟んで、八四六番歌が第二部を締め括っているのである。

今、八一五と八二八、八三三と八四六との呼応関係を説いたが、そうなると、どうしても容喙したくなる問題がある。それは、武田祐吉著『萬葉集全註釋』の指摘以来定説となつた八一五番歌の第四句の本文「梅を乎岐つつ」(次点本系本文)に対する「一抹の疑念である。というのも、私案にしたがうかぎり、八四六の「長き春日をかざせれど」が八三三の「梅をかざして」に対応しているように、八二八の「折りかざしつつ」も八一五の「梅を乎利つつ」(新点本系本文)に対応していると考ええる方が首尾の照応において望ましいからである。大伴家持の追和歌「春のうちの樂しきをへは梅の花手折り乎伎つつ遊ぶにあるべし」(卷一九・四一七四)等の傍証、また、一首の歌意から見ても「乎利」に分のないことは認めざるをえないが、それでもなお、澤瀉久孝著『萬葉集注釋』が余地を残したように、これをきっぱりと捨て去ってしまうことにはいささかの抵抗を覚え

ないわけにはゆかないのである。

ともあれ、総歌数三十二首、開宴歌及び閉宴歌の合計が四首、これらに縁ぞられた歌の数がそれぞれ十二首、加えて「幕間」の四首、これらはみな「四」の倍数になっている。そこにはしたたかな計算が働いていたとしかいいようがないと感じられるのであるが、いかなるものであろうか。

三

ところで、右に想定したように、この日の梅花の歌宴が整然とした二部構成をとっていたとするなら、どうして、わざわざ「幕間」に四つの歌が置かれたのであろうか。そこで次に、この四首が全体の中ではたしている役割についてしばらく考えてみたい。

まずは、一首目の八二九番歌。ここにおいてあらためて注意すべきであると思うのは、この歌宴全体の意図があくまで梅花賞賛に向けられる中で、ひとり「桜花」を持ち出してきている点である。このきわだった異質性は、明らかに一種のヒネリと解釈できよう。「いやめづらしき梅の花かも」(八二八)と「梅花」が讃えられて前半が終了した。一座がひと息ついたところで、「みなさん梅よ梅よとおっしゃるが、新参の梅の花なんぞ散ってしまっても、日本古来の桜の花がちゃんと控えているではありませんか」と、ひとつまぜかえしてみせるわけである。それはすなわち、あらたな問題提「起」にはかならない。

そして、これを「承」けるのが八三〇番歌である。「梅が散ったら桜があるさ」という前歌の刹那的な移り気に対して、「確かに、今年

の花は散りすぎてしまおうでしょうが、われらが梅は、未来永劫咲き続けることになっているのですよ」と、梅ひとすじの志操堅固な姿勢をきっぱりと示してみせる。

つづく八三一番歌であるが、この歌の「君」が「梅の花」を指すとする諸注の解釈は、はたして正しいのであろうか。竹を「この君」と称するのには確固とした典拠が存在するが、梅の場合はいかなるものか。『万葉集』における「君」が特殊な例外を除いて、多くは女性の立場から、男性をいうに用いられた言葉であることはすでに周知の事実であり、かつ、「梅花」は女性に喩えられるのであってみれば、この歌で「君」と呼ばれているのは、梅の花ではあるまい。それは梅ではなく、八二九番歌の詠主だったのではないか。そしてそうなれば、「思ふと」の主語は当然「梅の花」ということになる。すなわち、八三一番歌の第三句以下は、

梅の花(ヨ私ハ) 君を思ふと夜寝も寝なくに

ではなく、

梅の花(ハ)「君を思ふ」と夜寝も寝なくに

と理解すべきかと思われ、ここでは、夜どおし咲き匂う梅の花を、想を「転」じて恋に悶々として夜つびで眠ることのできない閨怨の女に見立てているのであり、一首は八二九番歌の詠主に対し「約束を守ってけなげに咲いた梅の花は、あなたゆえの恋の思いに苛まれて、夜も寝られないでいるというのに」と難詰する趣向になっている

るものと判断されるのである。末尾の「なくに」という表現には、「だのあなたには、はや桜の花に心を移すのですか」といった余意が十分にこもっている。

これら三首の見せた展開を收拾し「結」んでいるのが、最後の八三三番歌である。この一首は「まあまあ、みなさん。せっかくの新春好日。今日いちにちは、梅花をかざして存分に飲樂を尽くすのが上策」と、波紋の生じた場を原点に復させると同時に、やがて開始される正式な歌宴第二部の開宴歌を滑らかに導く役目を果たしているのである。

八二九から八三三番までの歌を以上のように位置づけてみることに許されるならば、この四首は明らかに独立したひとつのまとまりを形成していると捉えることができ、二部構成の歌宴の間にこの一群が配されている形態も決してゆえのないことではあるまいと思う。四首は、いわば「幕間」の座興だったのではなからうか。そして、それを第一幕と第二幕との間で奏でられた「間奏曲」と考えるか、それとも、第二幕への「前奏曲」と見なすかということになれば、八三二と八三三との呼吸から判断して後者の可能性の方が高いように思われる。

四

さて、かりにここまでが認められたとして、それでは残る第一部・第二部それぞれに組みこまれた十二首ずつの歌については、その構造をどのように説明すればよいのであろうか。

この点に関する私見は現在、率直にいった次の三つの考え方の間

をさまよわざるをえない。すなわち、

(1)各十二首の歌には、いずれも明瞭な構成意識と呼べるものは働いていない。

(2)各十二首は、いずれも四首ひと組を単位とする三部構成となっている。

(3)各十二首は、いずれも三首ひと組を単位とする四部構成となっている。

という三とおりの仮説である。これらのうちからあえてひとつを採ぶとするならば、今はひとまず(3)の考え方を採っておきたいと思う。というのも、書き遺された記録の構造を分析する立場から見ると、そこには三首ひと組構成の意識が存在したのではないかと推測させる材料が相対的に多いように感じられるからである。

はじめに、第二部第四組(八四三〜八四五)。

梅の花折りかざしつつ諸人の遊ぶを見れば都しぞ思ふ

妹が家に雪かも降ると見るまでにここだもまがふ梅の花かも

鶯の待ちかてにせし梅が花散らずありこそ思ふ子がため

平城京(八四三)からわが思う女性の家(八四四)、さらにはその女性自身(八四五)へと思慕の対象が漸次絞られてゆくが、この三首を貫流しているのは明らかに望郷の心であり、これらはそのテーマのもとに一括することができよう。

次に、第二部第二組(八三七〜八三九)。ここは、八三八番歌「梅の花散りまがひたる岡びには鶯鳴くも春かたまけて」を挟んで八三七・八三九の両首、

春の野に鳴くや鶯なつけむとわがへの苑に梅が花咲く
春の野に霧立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る

が同じ「春の野に」と歌い出されていながら、前者の「梅が花咲く」からの後者の「梅の花散る」へと、対照的な主題の推移を完了させており、八三九番歌はつづく第三組の「落梅」歌群（八四〇〜八四二）を導くことになるのである。

第二部第一組（八三四〜八三六）は、どうか。この組は、開宴歌を承けて梅花満開の春の到来を喜び（八三四）、待ちかねた梅花にめぐり逢えた今日の遊宴に謝し（八三五）、そして八三六番歌、

梅の花手折りかざして遊べども飽き足らぬ日は今日にしありけり

に到る。この歌の結句「今日にしありけり」といういいきりの口調には、またと来ぬ「今日」という一日に、梅の花咲く春の歓楽をいくら尽くしても尽くしきれぬ充実感を与えられた貴重さを、あらためてかみしめる詠主の感慨が表わされていて、宴席歌の流れはここでいったん小休止する。

翻って、第一部の第四組（八二五〜八二七）。一首目の八二五「梅の花咲きたる苑の青柳を纏にしつつ遊び暮らさな」は、直前の歌八二四との脈絡を断ち、先に詠まれた八一七を承けて「青柳」をクローズ・アップすることで、新たな歌いおこしを図る。これに反応したのが八二六番歌、

うちなびく春の柳とわが宿の梅の花とをいかにか分かむ

なのであるが、この歌の「分く」を優劣をつけるの意とする通説には疑問が湧く。なぜなら、「うちなびく春の柳」は、たとえば日本古典文学全集『萬葉集』の言及するように、やはり雪に見まがう「柳絮」と解すべきなのであって、一首の味噌はあくまで、春風に流れ舞う白い柳絮と梅の花弁とはどちらも雪さながらに見えてとても区別できないとする機智にあるはずだからである。「注釋」は、「分く」を「雪と柳、雪と梅との判別を意味するもの」と解する小島憲之氏（注2）の説を「少し考へ過ぎ」として退けているが、むしろこの語に「優劣」判定の概念までもも包含させることの方がゆきすぎではないかと感じられる。

八二六は、前歌に対し「あなたは青柳を纏にしようとおっしゃるが、今はいずれも風に舞う雪、いっただいどうやってその柳を梅と区別して手折ったらよいのか」と、いわば屁理屈をコネてみせる、そうした態の歌なのではないだろうか。そしてさらに、八二七「春されば木ぬれ隠りて鶯ぞ鳴きて去ぬなる梅が下枝に」がこれを承ける。「去ぬなる」は鶯の声をたよりの聴覚判断であるが、「梅の下枝に鳴いて飛び移ってゆくらしいのは、あれは鶯だ」と述べることは、梅と柳との判別の目印を前歌の詠主に向かって婉曲に示唆したものと受けとめられるように思う。そうだとすれば、三首は一群を形成していると認めることが可能になる。

遡って、第一部第三組（八二二〜八二四）では、前組末の八二二番歌が「飲みてのちは散りぬともよし」といい放って終止したの

を契機として、それまでの歌では扱われなかった散る梅をテーマに三首が歌い継がれるのである。偶然的の符合かもしれないが、第二部の第三組（八四〇）（八四二）も、やはり「落梅」を詠じたグループであった。

残る第一部第一組と第二組とがそれぞれひとまとまりであるとする根拠については、今のところ明示しえない。しかしながら、第一組第三首（八一八）が「ひとり見つつや春日暮らさむ」と、しんみりとしたコヒの情緒を色濃くしたのに対して、第二組第一首（八一九）は「世の中は恋繁しゑや」とこれに応じながらも「梅の花にもならましものを」と結び、梅花を主役の席に連れ戻してきているわけであるから、ここに区切れを想定するのもあながち無理ではあるまい。主役に復帰した梅はさっそく「梅の花今盛りなり思ふどちかざしにしてな今盛りなり」（八二〇）と、最大級に讃えられることになるのである。

右に説明したように、「天平二年筑紫梅花の宴」第一部・第二部の実質を担う各十二首ずつが、三首ひと組を単位とする四部構成と考えてよいならば、これまた「四」という数にちなんでいることになつてくる。

五

これまで述べてきたところを総括整理してみると、結局次表のようになる。

8	1	5
8	1	6
8	1	7
8	1	8
8	1	9
8	2	0
8	2	1
8	2	2
8	2	3
8	2	4
8	2	5
8	2	6
8	2	7
8	2	8

【第一部】

9	0	1	2
8	2	3	3
8	2	3	3
8	2	3	3
8	2	3	3

8	3	3
8	3	4
8	3	5
8	3	6
8	3	7
8	3	8
8	3	9
8	4	0
8	4	1
8	4	2
8	4	3
8	4	4
8	4	5
8	4	6

【第二部】

私案のうち、各々が三首ひと組の四部構成であったという部分には固執しないつもりであるが、その他の点には当面こだわってみたいと思う。なぜなら、八二九までを上座、八三〇以下を下座の歌と想定する案^(注5)、漢詩の絶句形式に倣った四首一連の八群構成を想定する案^(注6)、はじめの八首を第一次、残りの二十四首を第二次歌宴の所産と想定する案^(注7)、末尾四首に「波紋型対応」を認定し、これを一座を統括する要の世話役の座と想定する案^(注8)、全体を二分割して十六首二群の円座もしくは対座構成を想定する案等々、今日まで提唱されたどの試案よりも、その構造分析の合理性において勝っているのでは

ないかと考えるからである。

この歌宴の遺した歌数三十二は、間違ひなく揃えられた数字である。当日新春の梅花を寿ぐ宴会は、途中中断を挟む二部構成で計画実施された。第一部・第二部ともに開宴歌・閉宴歌が各一首、その間におのおの十二首の歌が詠み継がれ、また「幕間」にはおそらく第二部への導人的意味を帯びた四首が、一段とくつろいだ雰囲気の中でかけあわれたのである。

最後になったが、本稿では、詠主の実像をいっさい捨象して論を進めた。もとより意図あつてのことである。これをかりに「歌の場の平等」という言葉にでも委ねてしまつたとすれば、それはあまりに乱暴な態度と評されようか。

注

- (1) 東茂美「園梅の景」(古代文学、昭58・3)
- (2) 「原據論の周邊」(『神田博士還曆記念書誌學論集』、昭32)
- (3) 前節では、自ら提示した三つの仮説のうち(1)の考え方にしたがって論述したが、かりに(2)の「四百心と組を単位とする三部構成」という考え方に則してみるならば、第一部第三組から第二部第三組までの四グループにおいて、その最初と最後に「鶯」(ただし、八三四のみ「百鳥」)を詠みこんだ歌のすべてが配置されている点や、第一部の各組では、いづれも「首目」に「青柳」が詠みこまれている点などを糸口に、あるいは、別の法則性を説明することが可能かもしれない。また、(1)は要するに各自が思い思いに詠歌していったもので、そこに法則性を認めようとするごとく自体がもともと無意味であるとしてこれを放棄する考え方で、三者の中では、当然のことながらもっとも楽な捉え方となる。
- (4) 伊藤博「園梅の賦」(日本文学、昭46・11)「万葉集の歌人と作品」下、

昭50・塙書房)、大久保廣行「梅花の宴歌詳考」(都留文科大研究紀要、昭48・6)、新潮日本古典集成「萬葉集」。

(5) 吉川貫一「梅花歌三十二首」試論(文林、昭44・3)「萬葉雜記」、昭57・和泉書院

(6) 植垣節也「梅花の歌三十二首考」(兵庫教育大研究紀要、昭56・8)「古典解釈論考」、昭59・和泉書院

(7) 渡瀬昌忠「四人構成の場—U字型の座順—」(萬葉集研究)第五集、昭51・塙書房

(8) 後藤和彦「梅花の歌三十二首の構成」(『万葉集を学ぶ』第四集、昭53・有斐閣)